

2020年2月9日

第48回日本免疫学会総会・学術集会に参加して

この度は、BioLegend/Tomy Digital Biology トラベルアワードプログラムに選考していただき誠にありがとうございます。

本アワードプログラムを利用して2019年12月に開催された第48回日本免疫学会総会・学術集会に参加してまいりました。私にとって初めて参加する大きな学会でしたので見るものすべてが新鮮でとても刺激を受けるものとなり、非常に良い経験となりました。今回はその中でも特に印象に残った演題について2つご報告いたします。

1日目 13:30~「Special Lecture-Prof. Tasuku Honjo」

2018年にノーベル医学賞・生理学賞を受賞された京都大学特別教授の本庶佑先生の講演でした。本庶先生が発見され、ノーベル賞受賞へつながった「PD-1」に関するお話や、さらには本庶先生の研究者としての生い立ちなど非常に面白くためになる講演でした。これまでのがん療法は放射線療法や抗がん剤による治療などいわば「がん」そのものに対する直接的な治療方法が主流でした。しかし本庶先生が発見された免疫細胞上に発現しているPD-1は、免疫に対するブレーキとして働いていることが分かり、そのブレーキとなっているPD-1を働かないようにすることで、再び免疫細胞の免疫機能を働かせることでがん細胞を攻撃できるようになる、という私たちの体にもともと備わっている免疫細胞を利用してがんの治療を行うということができるといふ発見でした。つまり従来のがんそのものに対する直接的な治療ではなく、免疫細胞を介してがんを攻撃するという新しい治療方法へとつながる発見であるということが分かりました。

ノーベル賞を受賞された方の講演を聞ける機会などなかなか無いのでとても良い経験となりました。

3日目 13:30~「Workshop 17 Allergy-1 : skin inflammation」

獨協医科大学の林先生らによるアミノ酸トランスポーターLAT1のT細胞誘導性皮膚炎症に対する機能に関する発表でした。LAT1はもともとがんの発症機序に深くかかわることが報告されていました。本研究ではT細胞依存的に皮膚炎症を誘導したマウスにおいて皮膚炎症部位に存在するT細胞にLATが高発現すること、さらにLATの阻害剤であるJPH203の投与により、組織腫脹や好酸球数、炎症性サイトカイン及びIgEの産生が抑制されることを発見しました。したがってLAT1がアレルギー性疾患の発症にも関与しており、LATが新たなアレルギー疾患の治療標的となり得るといふ発表でした。